

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ



長宗我部顕彰会
吉松 由宇子

令和につなごう土佐人の血

皇となられ新天皇が誕生しまし
た。今後様々な儀式を経て、天
皇一世一代の儀式をされる即位
式（御戴天）が取り行われる。

今を去る事九十年前の昭和三
年十一月十日、昭和天皇の即位
式（御戴天）が厳かに行われま
した。その際『土佐の出来人』
と称される長宗我部宮内少輔秦
元親が再評価され従来の冠位で
ある従四位下より五段階越階し、
正三位の位が授けられたのでし
た。これは秦の始皇帝を祖の元
祖とし、秦河勝（聖徳太子に仕
へ冠位十二階の制度や十七条の
憲法改正等、古代国家の建設に
関り、高く評価されている。）そ
して元親を経て江戸幕府以降歴
史の表舞台より消えた二百六十
年を含めた全ての長宗我部家の
系図を昭和天皇が認め（公に認
められたことになる）。そして、
坂本龍馬をはじめ多くの志士の
尽力により十五代将軍徳川慶喜
は、その英断により大政奉還を
受け容れることを朝廷に届ける
その時、長宗我部元親公舎弟島
弥九郎末裔十二代与助重親は秦
神社建設を決意し、明治三年に

本年の五月一日、前天皇が上
皇となられ新天皇が誕生しまし
た。今後様々な儀式を経て、天
皇一世一代の儀式をされる即位
式（御戴天）が取り行われる。

皇となられ新天皇が誕生しまし
た。今後様々な儀式を経て、天
皇一世一代の儀式をされる即位
式（御戴天）が取り行われる。

宗我部地検帳等、長宗我部政権
の残したその功績によるもので
あります。この冠位の贈位は昭
和四年一月二十八日長宗我部元
親の墓所（高知市浦戸天甫寺）
前で昭和天皇勅使により友親氏
（ちか）
祖父親に授けられました。

この希代の名家長宗我部家を
支え元親を四国の霸者となしめ
た一領具足の存在
を忘れてはならない。
秀吉が没し、同年五
月十九日には京都伏
見屋敷で元親が死亡
した。後を継いだ盛
親はその翌年九月
二十五日関ヶ原の戦
で敗れ、全ての領地
が没収され盛親は京
都所司代監視のも
と、一浪人として暮
らすことになる。一
方土佐一国を配領し
た山内一豊入国に際
し、徳川家康は盛親

創建されたと伝えられる。織豊
時代の名城として有名な浦戸城
址（高知県立坂本龍馬記念館建
設地）そして長宗我部百箇条、長
宗我部地検帳等、長宗我部政権
の残したその功績によるもので
あります。この冠位の贈位は昭
和四年一月二十八日長宗我部元
親の墓所（高知市浦戸天甫寺）
前で昭和天皇勅使により友親氏
（ちか）
祖父親に授けられました。



六体地蔵 一領具足の碑

の本城である浦戸城受取を井伊
直政に命じた。これに対し「上
意受けるべし」との上級武士に
対して「土佐半国叶はずば一郡
は一途に主家を思い散つていつ
ても」長宗我部家に残して欲し
た一領具足の魂を称えるために
『この地浦戸の古戦場』ではじ
まる土井晩翠の忠魂不滅の碑が
静かに立っている。これらの六
体地蔵中でも阿弥陀如来は長年
の雨風に晒されて痛みが激しく、
その地を管理する長宗我部顕彰
会（会長森田康彦八十九才）の
人々の尽力で広く寄付金を呼び
かけ修復しようと計画していま
す。その後二百六十年山内家は
上流を流れる上士、底流を流れ
る下士三つの異なる流れが存
在することになるのです。無論
のこと底流の流れは長宗我部の
遺臣であり一領具足の末裔であ
る。その流れは幕末倒幕の志士
として一気に噴出することにな
る。島与助重親十二代もその一
人である。

長宗我部十七代当主の長宗我
部友親氏は、ハード面のみでな
くソフト面で長宗我部新資料を
発掘研究する部会を若者に創つ
ていただきたいと望んでおられ
ます。

上俊三に魅せられて

こと～

徳島大学名誉教授

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 副会長

渋谷 雅之さん

はじめに

渋谷雅之先生は、現代龍馬学会を中心となって支えている方です。本来のご専門は「薬学」ですが、日本の薬学の祖である「長井長義」博士の研究と古写真の研究が高じて、すっかり幕末、維新期の研究者ともいえる実力と風格を備えてこられました。

その手法は、極めて実証的で古文書または手紙の解説、そして古写真の分析から始まります。隔月で実施している現代龍馬学会の理事会においても、「いろは丸事件」の解説と新説を次々と発表されているのです。

前後しますが、先生は中土佐町久礼のお生まれです。徳島大学薬学部を卒業され、京都大学大学院でさらに研究を深められました。昭和48年から徳島大学に勤務。平成19年に徳島大学副学長で大学勤務を終えられました。その終盤に「長井長義長崎日記」等の編集に携わられたことで幕末史の研究に深い関わりを持つこととなつたのです。(聞き手：宮英司)

渋谷先生はライフワークともいべき「近世土佐の群像」シリーズの発刊を続けてこられました。第1巻から第9巻まで出され、別巻も第2巻が発刊され、完結しました。すべて私費出版です。

『近世土佐の群像』などといふサブタイトルは、少し大きすぎます。この中で次のように述べられています。

「近世土佐の群像」などといふサブタイトルは、少し大きすぎるかもしれません。これらの群像は歴史に名を残した人々を指すのではなく、土佐の歴史の中ではマイナーな人々のことである。中でも、激動の時代を一つの志をもって生き、報われずには去つた人々である。私自身も技術者の方に興味がシフトしやすい。これらの人々が、それぞれマイナーだった理由は

うなものである。出版社から出せば、それだけ多くの人に読まれるることはわかっているのだが、図書館等に少部数でも存在すれば、百年もたてば似たようなものである。(一部略)

「歴史は勝者によつて書かれることで、成功者はいろいろと書かれる。一方、敗者については、普通歴史学者の興味をひく機会が少ない。だから私は、

井上俊三、樋口真吉、萩原三圭、池道之助、寺村左膳など、土佐の歴史ではマイナーな人々のことを書きたいと思いました。彼

行部数や寄贈先は……

「図書は300部発行しました。たとえ話ですが、一般に龍馬の思想をあらわす文書と言われている『藩論』は、今から150年前に200部印刷されました。ましたが、現代に2冊だけ残り、1冊は戦火で焼かれました。今、残っているのは1冊だけです。そこで300部つくれば2～3冊残るだろうと思つていま

る。だから、成功者はいろいろと書かれる。一方、敗者については、普通歴史学者の興味をひく機会が少ない。だから私は、

（井上俊三、樋口真吉、萩原三圭、池道之助、寺村左膳など、土佐の歴史ではマイナーな人々のことを書きたいと思いました。）

らについての記録はほとんどが世に出ていません。非専門家にも食い入る機会がある世界です。我が家が今日の繁栄が、いつたい誰のおかげなのだと考えるとき、それは歴史に名を残した人々だけによるものではないことは自明である。普通の本には取り上げられない、こうした人々の事績を後世に残す仕事のことは、私が大学の職を離れる前から意識の中についた。歴史に関して浅学の私にとっては、かなり荷の重いことだが、これらのことは私自身がこれまで生きてきたことの証であり、先人に対する恩返しのよ

うなものです。出版社から出せば、それだけ多くの人に読まられるることはわかっているのだが、図書館でこのシリーズを手にしたときの喜びの姿が見えてくるような気がしてきました。

実際に、後世の研究者たちが図書館でこのシリーズを手にしたときの喜びの姿が見えてくる



渋谷雅之先生と

「近世土佐の群像」

あるだろう。そして、歴史に名が残らなかつた理由もあるであろう。一方、我が国の今日の繁栄が、いつたい誰のおかげなのだと考えるとき、それは歴史に名を残した人々だけによるものではないことは自明である。普通の本には取り上げられない、こうした人々の事績を後世に残す仕事のことは、私が大学の職を離れる前から意識の中についた。歴史に関して浅学の私にとっては、かなり荷の重いことだが、これらのことは私自身がこれまで生きてきたことの証であり、先人に対する恩返しのよ

うなものです。出版社から出せば、それだけ多くの人に読まられるることはわかっているのだが、図書館でこのシリーズを手にしたときの喜びの姿が見えてくる

（井上俊三、樋口真吉、萩原三圭、池道之助、寺村左膳など、土佐の歴史ではマイナーな人々のことを書きたいと思いました。）

らについての記録はほとんどが世に出ていません。非専門家にも食い入る機会がある世界です。我が家が今日の繁栄が、いつたい誰のおかげなのだと考えるとき、それは歴史に名を残した人々だけによるものではないことは自明である。普通の本には取り上げられない、こうした人々の事績を後世に残す仕事のことは、私が大学の職を離れる前から意識の中についた。歴史に関して浅学の私にとっては、かなり荷の重いことだが、これらのことは私自身がこれまで生きてきたことの証であり、先人に対する恩返しのよ

うなものです。出版社から出せば、それだけ多くの人に読まられるることはわかっているのだが、図書館でこのシリーズを手にしたときの喜びの姿が見えてくる

話題人 インタビュー

「長井長義と井 ~古写真と歴史探究で見えてきた

長井長義博士

(1845~1929年)

の「」と

お伺いしたいと思います。人物事典では、「日本薬学会初代会頭で日本の近代薬学の開祖である。エフエドリンの発見者である。」となっていますが…。

「旧制の徳島高等工業学校に、現在の徳島大学薬学部の元となる製薬化学部をつくった人物です。

1999年、徳島大学勤務時に日本薬学会の総会が徳島で開催されました。その時に長井長義の展覧会を実施することになりました。これが、本格的に土佐の近世史をかじり始めたきっかけです。

彼は、慶應3年から明治元年にかけて、日本の写真の開祖である長崎・上野彦馬邸に寄宿しています。龍馬の写真を撮影したといわれる土佐の井上俊三や、谷干城の弟と一緒にしました。そしてもっと詳しく、学術的、本格的に事実を知りたいと思いつめました。

薬学（化学）の研究者だから、歴史は分野外と思われるかもしれません。しかし、歴史は人文

科学の一分野であり、同じ科学だから研究の手法が良く似ています。…と言うより、原理的に全く同じです。たとえば、ある貴重な手紙が発見されたとする。しかし作為的な手紙かもしれない。ところが、関係のない別の人があじこを書いていたら、これは作為ではなく、証拠となります。

自然科学も独立した複数の実験結果を根拠にして一つの真実に迫ろうとする学門です。その真実をもとに、さらに別の真実を探ろうとしますが、人文科学の場合、その真実から一つの教訓を導き出し現代に活かすことが重要です。

それにしても歴史は面白い。長井長義は上野彦馬邸に寄宿しました。そこには土佐からきた井上俊三が先に寄宿していました。長井と井上の関係について調べようと青山文庫に出かけたりました。松岡氏は、龍馬の写真を実際に撮影した人物を研究し、井上俊三に関する論文をすでに発表しておられました。私は、長井長義から龍馬の写真と、井上俊三に關する論文と、いうよりも、長井と井上の関係を探り『いろは丸』に辿り着こうとしていました。

ずいぶん興味あるお話をあり

現代龍馬学会の
みなさんへ

みんなへ

渋谷雅之（しぶや・まさゆき）

profile

「近世土佐の群像」

- 第1巻「溝潤廣之丞のことなど」
第2巻「萩原三圭のことなど」
第3巻「空蝉のことなど」
第4巻「銃砲術の系譜」
第5巻「思い出ぐさ」
第6巻「樋口真吉日記（上）」
第7巻「樋口真吉日記（下）」
第8巻「土佐藩重臣日記（上）」
第9巻「土佐藩重臣日記（下）」
別巻(1)「いろは丸始末」
別巻(2)「日野春草残映」

その他の著書

- 【英傑たちの肖像写真】：渋谷先生が龍馬の写真について詳述されています。（龍馬記念館でも販売中です。）
- 【日本の薬学創始者 長井長義】
【長井長義長崎日記】
【長井長義ベルリン通信】
【長井長義博士関係資料一覧】

われのみぞ知る

宮川 穎一

「世の人はわれをなにとも
ゆはゞいへわがなすこととは
われのみぞ知る」

龍馬が書き残して京博に伝わる有名な和歌である。春夏秋冬花鳥風月ではなく恋歌でもないこの歌は龍馬が「他人に理解されない自分の鬱屈」を大声で叫ぶものであり、勝手に「尾崎豊か!」くらい筆者は思っていた。しかし最近、この和歌の本歌と思われるものを見つけた。それは平安時代の歌人、紀貫之の和歌である。

「人知れぬ思いのみこそ

わびしけれわが嘆きをば
われのみぞ知る」

（古今和歌集 恋歌二六〇六）

坂本家の人々の和歌のことを歌

集『たちばなの香』を引いて紹介

された菅宗次氏の『坂本龍馬と和歌』（平成二十五年）でも指摘され

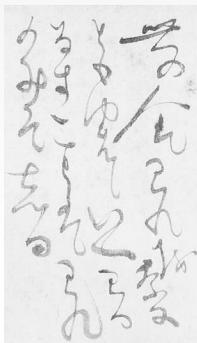
ているが、江戸時代後期の和歌は古今和歌集を手本とするものであつた。『たちばなの香』（弘化二年・一八四五）という歌集は紀貫之没後九百年の記念事業として紀州の僧觀尊が編集して和歌千三百首を載せた本であり、その中に龍馬の父八平や兄権平、八平の亡母久の和歌が収められていて、出版経緯も含め興味深い。龍馬の家族の和歌も絵に描いたような古

調であり、紀貫之様万歳だ。龍馬はそのような文化環境で育ったのである（坂本氏家系に「先祖は紀姓」とあるのも無関係ではないのか）。

筆者は龍馬の和歌のことを「鎌倉時代の新古今調だ」と書いたことがあるが「古今調」に訂正しておきたい。

明治二十年代に正岡子規が「古今集はくだらぬ集。紀貫之は下手な歌詠み」などとこきおろして短歌革新運動をおこなったため現代人の古今和歌集への評価はやや低い。龍馬の歌も子規にかかるれば非難の対象だろうが、自我的のストレートな表明という視点で見れば、自分を出さない江戸後期の和歌の規範を破つて斬新とも言える。

和歌の評論に長けた紀貫之に「龍馬のこの歌はいかがですか?」と聞いてみたら「素直なれども、かおりなし」という論評かも知れない。



坂本龍馬筆「世の人は」和歌
京都国立博物館蔵 国重文

コラム・龍馬のこと

徳島の龍馬

宮 英司

龍馬の銅像が増え始めた頃、徳島に龍馬が立ち寄ったことはないのかな…と不思議に思って調べたことがあった。残念ながら、その時はネット情報も普及する前のことであり、期待外れに終わった。先日、土佐史談会に出かけた折に、徳島の新聞の特集記事が目に飛び込んできた。コピーをしていただき、自宅で検索してみて驚いた。

龍馬は脱藩する前に藩の許可を得て、文久元（1861）年10月11日、讃岐の丸亀に剣術修行に出向き、その後、武市瑞山の使者として長州の久坂玄瑞を訪ねたり、大坂・京都を巡って情報収集をしている。文久2（1862）年2月、讃岐に戻った龍馬は勤王活動の資金を得るために、美馬の山奉行・鎌村熊太を訪ねた…というものの。

しかも、この鎌村家住宅の主屋は1839年に建築された木造平屋建てで建築当時からほとんど変わっていないというから驚き。さらに、龍馬のためにしつらえた隠し部屋や龍馬が使用した布団・番傘がそのまま残っているという。まだ、その他に「あっ」と驚く龍馬の遺品があるがここでは敢えて書きません。（ぜひ、検索してみてください。）

これは歴史研究家・Hさんのブログから紹介させていただいたものです。平成の初期に調べても、ちっとも出てこなかつた「徳島と龍馬」の関わりが天こ盛りなのに驚きました。こうなると龍馬の伝承地はまだまだ出てくるのではないかと期待が膨らんでいます。

Hさんの説によると、この時、この場所で、龍馬はこの勤王家・鎌村熊太と意気投合し、後の「船中八策」に繋がる着想を得たとされています。鎌村邸は現在「鎌村家住宅」として、国指定の文化財に登録されているとのこと。なお、龍馬はこの年2月29日に高知に帰り、3月24日に脱藩しています。

“話してみるかよ”

土佐の東照宮 竹林寺

海老塚和秀

私が住職を務める竹林寺には徳川家康公ゆかりの仏像とされる阿弥陀如来像がお祀りされています。

平成24年、寺に伝わる古文書の悉皆調査が行われた際、一通の書状が確認されました。それは土佐山内家二代藩主・山内忠義公の妻・阿姫が当時の竹林寺住職に宛てたもの。

阿姫は徳川家康公の姪（家康の異父弟である掛川藩主・松平定勝の次女）に当たり、慶長10年（1608）、家康公の養女として土佐に輿入れしました。その書状は、阿姫が阿弥陀如来像を竹林寺に施入するので末代にわたり家康公の菩提を弔うとともに山内家の繁栄を祈念してほしいという内容で、委細はすべて同像の背中に書き付けてあるというものです。

その後のX線調査で如来像の背面より家康公の戒名をはじめ同像施入の経緯を記した銘文が確認され、寺の伝承が事実であることが立証されたのでした。慈悲に充ちた尊像のお顔を拝する時、亡き養父を偲びその御靈を弔おうとする阿姫の切なる思いが伝わってきます。

また、寺には家康・秀忠両公の靈牌が伝わっています。そこからは、徳川家康による山内家の土佐入国や阿姫を通じた徳川家のつながりを始めとする山内家や土佐藩の将軍家に対する忠節や敬重の念が伺われます。こうしたことから江戸期において竹林寺は土佐における東照宮的な役割を果たしてきたという一面が見えてきました。

竹林寺では本年春、本坊の建替に伴い阿弥陀如来を本尊とし徳川家康・秀忠両公の靈牌を始め阿姫を含めた山内家歴代藩公の位牌を祀る仏殿を新設し、その御堂を阿姫の戒名より「皓月殿」と命名しました。

なお、高知城歴史博物館で本年11月25日まで開催されている『大名墓をめぐる世界 そのすべて』展に阿弥陀如来像や阿姫ゆかりの品が出展されています。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp